

各章の構成や内容についてのコメント

監修者 昭和女子大学 ボルジギン・フスレ教授

日本モンゴル外交関係樹立 50 周年記念オンライン資料紹介公開記念会(2022 年 2 月 24 日)

日本国国立公文書館鎌田薫館長、モンゴル国公文書管理庁サムダンギーン・エンフバータル長官、皆さま、こんにちは。

ご紹介に預かりました昭和女子大学のボルジギン・フスレです。

日本モンゴル外交関係樹立 50 周年記念プロジェクト、日本国国立公文書館とモンゴル国公文書管理庁共催展示会「日本とモンゴル——綴られた交流のあゆみ——」の公開記念会が開催されますことに心からお喜びを申し上げます。

監修者にとって、このような席上で、今回のオンライン資料の一端を述べさせていただくことは、たいへん光栄であり、鎌田館長、エンフバータル長官をはじめ、一年以上も前から苦勞を耐え忍び、黙々とこの展示会に着手、準備されてきた職員の皆様、並びにご列席の皆様に、敬意を表すとともに、深く感謝申し上げます。

アーカイブは歴史の記録であり、人類の知的財産です。長い歴史の間、日本とモンゴルは、複雑で密接な関係を持ってきました。本展示会「日本とモンゴル——綴られた交流のあゆみ——」は、文字通り、日本とモンゴルの交流の歴史を、精選された両国のアーカイブで綴っています。

今年には日本モンゴル外交関係樹立 50 周年であり、チンギス・ハーンの生誕 860 周年でもあります。日本とモンゴルの最初の接触は、13 世紀、具体的に言えば、1274 年と 1281 年の、高麗軍も含む、モンゴル帝国の軍隊の襲来でした。

本展示会の「13 世紀の日本モンゴル関係」の章で展示されているモンゴル帝国から日本への国書、「深心院関白記〔じんしんいんかんぱくき〕」、モンゴル帝国の襲来の様子を描いた絵巻「蒙古襲来絵詞」、及び「八幡愚童記」は、いずれも、当時のことを知る、非常に貴重な資料です。

1321～23 年の間に刊行された歴史物語『至治新刊全相平話三国志』は、現存する世界で唯一の刊本であり、モンゴル帝国時代の出版活動、文化交流を示す生きている資料です。

19 世紀末期から 20 世紀前半のアジア大陸に進出した日本にとって、モンゴルはたいへん重要な戦略的意味をもっていました。19 世紀後半から 20 世紀初期にかけて、日本の多くの政治家、外交官、諜報将校、商人等がモンゴルを訪れました。

本展示会の「19～20 世紀初頭の日本モンゴル関係」の章で展示されているモンゴルを単騎横断した福島安正、キャフタヤフレーなどに滞在した日本人の資料、ボグド・ハーン政権

から日本への書簡などの資料により、世紀の変わり目のモンゴルをめぐる国際関係、政治、社会、経済状況、日本の戦略などを捉えることができます。

20 世紀、日本とモンゴルの間には2度も戦争が起きました。1939 年のハルハ河・ノモンハン戦争、いわゆるノモンハン事件、1945 年当時のモンゴル人民共和国の対日参戦です。そして、その直後、1945 年 10 月から 1947 年 10 月にかけて、1 万 2000 余りの日本人がモンゴルに抑留されました。

本展示会の「“ノモンハン” 事件におけるソ連、外蒙古の伝単」などの資料及び「モンゴルの都市整備と日本人抑留者」の章の資料は、この三つの出来事を語っています。

「負」の歴史を乗り越えて、未来へと発展させていくことは、非常に難しいですが、意義が大きいです。日本人のモンゴル抑留は、一方では、北東アジア地域の枠組みのなかでの日本とソ連・モンゴルの対立により生まれたものでしたが、他方では、第2次世界大戦終結後の両国の民間の交流、日本、モンゴルの国連加盟および両国の外交関係の締結において、間接的に一定の役割をはたしました。また、外交関係の締結をめぐる交渉において、日本とモンゴルはともイニシアチブを發揮しました。展示会の「戦後の文化交流(1950～1960年代)」の章と「外交関係樹立(1972)」の章は、まさにこうした日本とモンゴルの錯綜した関係のダイナミズムをしめしています。

ペレストロイカ以降、今日にかけて、日本とモンゴルは、21 世紀東アジア新秩序の構築にむけて、互いに協力し、模索してきました。「20 世紀末～21 世紀の日本モンゴル交流」の章は、両国の政治、安全保障、防衛、地域間及び国際協力、経済協力、文化・教育・スポーツ交流のプロセスを再現し、未来志向の視座を探っています。

歴史の対立を乗り越えた日本とモンゴルの経験から何が得られるかを考える本展示会は、今日の東アジア諸国間の歴史認識問題や領土問題、資源利用、環境保護問題、さらにはそれらをめぐるナショナリズムの問題の解決において、社会的インパクトを与えることが期待されます。

どうもありがとうございました。